

## 「非当事者」にできること

### ——東日本大震災以後の文学にみる被災地と東京の関係

加島 正浩

#### はじめに

東日本大震災から5年が経過した現在、それについて書かれた文学作品は多く存在するにもかかわらず、それを分析する論者の立場からは書くことの困難さが指摘されることが多い。例えば助川幸逸郎は、震災は大多数の人間にとってそれまでの生き方と無関係に襲ってきた「意味を欠いた災厄」であるとし、体験を意味づけることなく「意味を欠いた災厄」をそれそのものとして語ることの困難さを述べ<sup>1</sup>、木村朗子<sup>2</sup>は表現のために「死者を利用している」という作家間の非難などにより、震災後のこれまでにない局面を捉えて書くことが困難になっている現状を指摘している<sup>3</sup>。また最近の論考においても川村湊が「現実的な行動や実践、運動へと向かう言説に対してはきわめて強い規制・制約がもたらされていると言わざるをえない」<sup>4</sup>と述べるなど、現在に至るまで様々な形で震災を書くことの困難さが意識されているといつてよい。

また福島に住み続けている「当事者」の立場から、「当事者」を傷つける表現を強く批判する論者も存在する。例えば小菅信子は福島が商品化され、政治利用され、傷つけられてきたことを指摘し、原発事故の被害に苦悩する人々の救済を中心に位置づけた脱原発・反原発論の必要性を説いている<sup>5</sup>。また開沼博は最初の著作である『「フクシマ」論』の序文において、中央の人間は「放射線という不可視なものがどれだけ自分に害をおよぼすのかが知りたいだけ」と述べ、自分の身に降りかかってきた恐怖感をどうにかしてふり払い、安心したいがために「フクシマを日常的な意識の範疇から葬り、二度と戻ってこないと確信したい」のだと指摘し<sup>6</sup>、近作の『はじめての福島学』においても「福島の人々はみな放射線に怯え苦しみ、流出しまくっている」という考え方を「偏見」とし、「現実の福島」と「モンスター化したイメージ上の福島」との溝は埋められないままにあると述べ、様々なデータに基づいて「福島」が放射線量の高い「死の町」であるという「イメージ」を払拭しようと試みている<sup>7</sup>。しかし開沼のデータの読み方は福島に貼りつけられた「イメージ」を払拭しようとするためのやや恣意的な読みであることも否定できない。例えば開沼は、原発から20キロ地点にある広野町の人口が震災以前は5500人程度だったのが、現在も5000人以上が住んでいるというデータを用い、「みんな放射能を恐れて避難しているに違いない」という考えを「イメージ」として否定しようと試みているが、開沼が用いる2014年時点の人口のデータの内訳をみれば、震災以前から住んでいた住民は出戻りも含め1800人ほどで、残りの3000人は福島第一原発復旧のための作業員であり<sup>8</sup>、元の住民の約6割は他地域へ避難しているということになる。

1 助川幸逸郎「アーサー・ウェイリーの東洋研究—〈三・一一〉を語る「文学のことば」をさがすために—」石塚正英編『近代の超克Ⅱ—フクシマ以後—』理想社、2013年11月、217頁

2 木村朗子『震災後文学論』青土社、2013年11月、59-60頁

3 川村湊「震災後の文学批評」『社会文学』44号、2016年8月、43頁

4 小菅信子『放射能とナショナリズム』彩流社、2014年2月、172頁

5 開沼博『「フクシマ」論—原子カムラはなぜ生まれたのか』青土社、2011年6月、10-12頁

6 開沼博『はじめての福島学』イースト・プレス、2015年3月、70頁

7 同上、359-364頁

確かに「みんな」が避難しているわけではないが、震災以前から住んでいた住人の約6割が避難しているデータを基に、住民は「放射能を恐れて避難しているに違いない」という考え方を現実からかけ離れたものとして否定することは難しく、大澤真幸が述べたような3・11に「遭遇したときにわれわれが感じていた衝撃に対応するような真実を、むしろ覆い隠す幕のような」<sup>8</sup>説明にも開沼の読みはなりかねない。福島やそこに住む「当事者」の実態とかけ離れた発言や表現が問題であることは確かだが、「当事者」が抱いて欲しい考えを印象づけるために現実を曲解することにも同様に問題があり、現実の実態がどのようにあるのかは様々な形で問われるべきであろう。

本稿では以上の考えのもと震災以前に被災地と直接関係をもたなかった作家の小説を考察の中心とし、「被災地」と東京の関係という観点から分析を行う。その際、放射性物質が広範に拡散していたゆえに東京に住む人々も震災の「当事者」であると考えられていた震災直後から、経年とともに東京から震災の経験が希薄になっていく流れに注意を払う。そのためにまず東日本大震災直後の小説が捉えた問題を確認した後に、震災の経験が希薄化していく中で発表された小説を分析するという手順を取る。具体的にはまず川上弘美の「神様 2011」とそれに関する川上自身の発言を取り扱う。川上の自作に関する発言の変化からは、東日本大震災が東京を含む日本の問題から地震・津波・放射能汚染の被害を受けた被災地の問題へと、捉え方が変化していることが読み取れる。次に震災の問題が被災地の問題としてみなされるようになっていく中で発表された、東京が震災を深刻な問題として受け止めていたのかどうかを問うている小説から「当事者」意識が希薄となる東京の様子を明らかにする。そして「当事者」意識が希薄になるばかりか、被災地を「汚染」された場所として、あるいは被災地の内と外を切り分けて、表象している小説を批判的に考察する。被災地の内と外を分けることは被災地への差別意識を醸成すると同時に原発の問題を被災地の問題に限定し、他地域の人間をそこから免罪することにつながりかねないからである。そして最終的に被災地に向けられる言葉が「当事者」を傷つける暴力となる可能性は常にありながらも、放射能汚染の問題を福島に押しつけ、それを忘れたように振る舞う人々に対して、福島の現実を突きつけて東日本大震災の忘却に抵抗しようとする作家の小説を分析し、東日本大震災以後の文学が果たしうる役割を提示することを目的とする。

## 1. 「わたしたち」が「当事者」だったころ—川上弘美「神様 2011」

東日本大震災をそれ以前の震災と決定的に隔てたもののひとつは、福島第一原発の事故であり、それによる放射能汚染の被害であった。そして震災直後は、放射性物質への恐れが福島のみならず、東京にも蔓延した。例えば古川日出男「二度目の夏に至る」<sup>9</sup>には水道水が放射性ヨウ素に汚染され、東京中のミネラルウォーターが消えたことが書き込まれ、天久聖一『少し不思議。』<sup>10</sup>ではテレビの報道により

原発事故の第一報を聞いた辰彦が、翌日の夕方には同居人の菜津子の実家がある  
鹿児島へと避難する姿が描かれる。しかし仕事や避難疲れから、辰彦たちは数日  
で戻り、二度目の大爆発でパニックとなった東京に直面する。

ヨウ素、セシウム、ストロンチウムといった怖ろしげな放射性物質の名が飛び  
交い、ツイッター上では予防法のデマが流れた。一週間後には水道水から乳児  
の摂取基準値を超える放射性ヨウ素が検出され、スーパー、コンビニのミネラ  
ルウォーターは一瞬で完売。多くの大人たちが乳児に戻ったのであった。日本  
に滞在する外国人は本国からの指示で母国へと退避し、辰彦たちと入れ替わ  
るように東京を離れる者も続出した。こうした振る舞いに対して一部からは  
「被災者の身になれ!」「恥を知れ非国民!」という感情論も噴出。被災者ではな  
くとも当事者ではあるという曖昧な立ち位置で人心は分裂した。<sup>11</sup>

11  
同前、166頁

事故直後は放射性物質が福島のみならず東京にまで飛散すると多くの人に捉え  
られたため、東京は混乱状態となる。天久はそのような状態に置かれた東京の空  
気感を、都民もまた地震や津波などで直接被害を受けた「被災者ではなくとも当  
事者ではある」という表現で言い表している。そしてそのような雰囲気下におい  
ては、多くの人々が東日本大震災を自分たちの問題として積極的に捉えていった  
といえる。

それを示す好例として1993年に発表された自身のデビュー作でもある「神様」  
を書き換えて、発表された川上弘美「神様 2011」<sup>12</sup>が挙げられる。「くま」と「わた  
し」が「あのこと」が起きて以来、防護服も着用せず散歩をする「神様 2011」には  
現在に至るまで多くの言及が存在するが<sup>13</sup>、「わたし」が散歩を終え部屋に戻った  
後、「いつものように」一日の総被曝線量を計算した後「悪くない一日だった」と述  
べる小説の末尾と、「くま」が「わたし」に別れの抱擁を交わす以下に引用する場面  
が特に注目されている。

12  
川上弘美「神様 2011」『群像』6月号、2011年

13  
本稿で言及しなかったものとして他にも、  
田中和生「『あのこと』以降を描く、もう一つ  
のデビュー作『神様 2011』」『週刊文春』  
2011年10月20日、松本和也「川上弘美を読  
む」水声社、2013年3月、小森陽一『死者の  
声、生者の言葉—文学で問う原発の日本』新  
日本出版社、2014年2月などがある。

くまはあまり風呂に入らないはずだから、たぶん体表の放射線量はいくらか  
高いだろう。けれど、この地域に住みつづけることを選んだのだから、そんな  
ことを気にするつもりなど最初からない。<sup>14</sup>

14  
川上弘美「神様 2011」講談社、2011年9  
月、35頁

例えば鈴木愛理は、「神様 2011」の末尾を捉え、「悪くない一日だった」という  
一文で終わることによって「道や川が放射能に汚染されているかもしれないことを  
気にしつつ生活すること」が「日常的なこと」になったことが示されているとしてい  
る<sup>15</sup>。また高橋源一郎は上記引用の一文を作中の「白眉」としたうえで、『『わたし』  
は、この大地を汚した者のひとりとして、その責務として、汚染された土地に住みつ  
づけることを誓うのである」と述べ<sup>16</sup>、安西晋二も「『わたし』は、放射能汚染の問題  
を、部外者ではなく当事者の一人として問い続けていく姿勢を、読者に喚起してい  
る」と指摘している<sup>17</sup>。ここからは「道や川が放射能に汚染されているかもしれない」  
恐れが日常となった「この地域」に住みつづけると決断することが、放射能汚染の問  
題と真摯に向き合う態度をもった「当事者」であると捉えられていることがわかる。

15  
鈴木愛理「現代小説の教材価値に関する研究  
—川上弘美「神様」「神様2011」を中心とし  
て」『広島大学大学院教育学研究科紀要、第  
二部、文化教育開発関連領域』61号、2012年  
12月、123-132頁

16  
高橋源一郎『非常時のことば 震災の後で』  
朝日新聞社、2012年8月、133頁

17  
安西晋二「『わたし』をめぐる物語の変容—  
川上弘美「神様」と「神様 2011」」『國學院大  
學教育学研究紀要』49号、2015年2月、  
71-81頁

18  
注2に同じ、91-92頁

19  
注18に同じ

20  
注15に同じ、44頁

21  
「デビュー作を震災後の物語に―作家川上弘美さん、漂う怖さ「日常」再考」『日本経済新聞』、2011年10月5日夕刊、聞き手、瀬崎久見子

しかし「この地域」とはどこを指すのであろうか。木村朗子は「神様 2011」において一貫して「あのこと」と提示されるものは原発事故の爆発と放射能のとめどない拡散を指すものと理解されるが、それが「あのこと」と記されることによって、執筆時からみればフクシマ後を予言する近未来小説だということになり、「あのこと」を世界のどこかで過去にそして未来に起こる原発の事故と捉えれば、2011年の限定を超えて世界への予言としても読まれうる普遍性をもつと指摘している<sup>18</sup>。また同様に安西晋二も「神様 2011」は東日本大震災以後の日常を想起させるものの、震災や一連の事故が「あのこと」と記されることによって「〈3.11〉以前と以後との起点を設けるものではなく、ふたたび起こりかねない震災ないしは原発事故をも内包する起点」となっていると指摘しており<sup>19</sup>、上記2つの指摘を踏まえれば、「この地域」についても「あのこと」と同様の指摘を行うことができるだろう。つまり「この地域」が、例えば「福島」などと記述されていないことにより、それが指す地域は限定されず、解釈する地点によって変化しうることである。そしてその変化を著者の川上自身が感じているようにも思われる。『神様 2011』の「あとがき」において川上は、2011年の3月末に「神様 2011」を書いたと述べたうえで、以下のように記述する。

日常は続いてゆく、けれどその日常は何かのことで大きく変化してしまう可能性をもつものだ、という大きな驚きの気持ちをはこめて書きました。静かな怒りが、あの原発事故以来、去りません。むしろこの怒りは、最終的には自分自身に向かってくる怒りです。今の日本をつくってきたのは、ほかならぬ自分でもあるのですから。この怒りをいただいたまま、それでもわたしたちはそれぞれの日常を、たんたんと生きてゆくし、意地でも、「もうやになった」と、この生を放りだすことをしたくないのです。<sup>20</sup>

「神様 2011」を発表直後の川上は、続いていく日常が大きく変化してしまう可能性をもつことが「大きな驚き」であったといい、「今の日本をつくってきたのは、ほかならぬ自分」だと述べ、原発事故によって大きく変化した日常は日本とそれをつくってきた「自分」の問題であると明示される。そして「わたしたちは」それぞれの日常を生きて述べられ、原発事故による日常の大きな変化を「わたしたち」がそれぞれに被っていると捉えられていることがわかる。

しかし震災から約7ヶ月が経った時点で川上は『神様』を、くまと「わたし」が散歩に行くだけの日常の話で、「わたしにとっては、マイノリティーの話」と述べたうえで、「神様 2011」について以下のように語っている。

「神様 2011」では、登場人物が、もっとマイノリティーになってしまったように感じた。もちろん、彼ら登場人物と同じ立場に、自分も含めて誰もがなる可能性がある。私の暮らす東京などは、もとの日常に戻つつあるけれど、大震災で日本にマイノリティーともいえる地域ができてしまったのかもしれない。そのことを忘れないようにしたい。<sup>21</sup>

ここにおいては原発事故後の大きく変化した日常を生きなければならない登場人物が「彼ら」と語られ、以前は「彼ら」と同じように原発事故による日常の大きな変化を被っていたはずの「わたしたち」は「もとの日常に戻りつつある」と述べられる。「日本にマイノリティーともいえる地域ができてしまったのかもしれない」という発言には、放射能汚染による様々な苦難が、東京では意識されなくなり福島のように集中するようになった現実を読み込むことも可能であろう。安西は初出や単行本の掲載状態から「神様 2011」は「神様」や「あとがき」とともに読むことが求められているように見えると述べているが<sup>22</sup>、上述した先行論の読みは「あとがき」と、それが書かれた震災直後の空気感をも含めて「神様 2011」を読むゆえに成立しているといえるだろう。なぜなら『神様 2011』に記された、汚染に苦しみ、大きく変化した日常を生きなければならず、直接の被災地を超え出た広い範囲を示しているように読めた「この地域」を、川上の言葉の変化に導かれるように「マイノリティー」となった地域を指し示すものとして読む場合、「神様 2011」は「マイノリティー」となった地域を忘れないために記されたものとして読むことを可能にするからである。

22  
注15と同じ

## 2. 「当事者」でなくなった東京、孤立していく被災地

「神様 2011」は「あのこと」や「この地域」などと、言葉に対応する現実の出来事が明示されないことで解釈の幅を保持していたがために、原発事故直後の混乱から忘却という急速な空気感の変化を背景に作品が意味する内容を、「わたしたち」も「当事者」として原発事故後の変化と汚染の危険性に向き合いその日常を生きていくという意味から、放射能汚染の危険にさらされた「地域」に住む「当事者」の人々のことを記憶するという意味へと変化させた。それは「当事者」の範囲が、時間の経過とともに、東京を含む「わたしたち」から、被災地に住む人々へと限定されていった変化でもあるだろう。

しかしそもそも東京に住み、震災の「当事者」であった人々が、被害の深刻であった被災地の人々と同じように震災を深刻な現実として受け止めていたのだろうか。川上が「もとの日常にもどりつつある」と述べるように、時間の経過とともに震災の経験が被災地の外で強くは意識されなくなると、そのことを問う小説が書かれるようになる。

例えば2012年の1月に発表された伊藤たかみの「ある日の、ふらいじん」<sup>23</sup>は「ふらいじん」という震災を受け本国に帰国した外国人を日本に残った外国人が揶揄する言葉をタイトルに据える。そして、外国人が外国人を揶揄するということから、震災をどこか他人事としてとらえてしまう人を「ふらいじん」と呼んで描いている。そこでは震災時に海外に住んでいたために、震災をどこか他人事として捉えてしまう眞理子が日本にいたら「悲しさとか希望とか、そこから来る連帯感

23  
初出は伊藤たかみ「ある日の、ふらいじん」『文学界』1月号、2012年。単行本収録時に「ふらいじん」に改題。引用は伊藤たかみ「ふらいじん」『あなたの空洞』文藝春秋、2015年8月



とかを一緒に持てたのかな」と考えるのに対し、日本にいたやつでも「ふらいじん」みたいなやつはいると瑛多は答え、水道水が汚染されているとの不安から水を買って集めようとする老人のことを思い返す。

24  
同前、21-22頁

都内の気候はしばらくよかったので身体の苦痛はなかったけれども、腹立たしかった。数日やってみて気づいたことに、並んでいるのが圧倒的に老人だったからだ。テレビでも大丈夫だと言っているのだし、大人は、ましてや老人に至っては、我先にと水を買って占めるなど考えたからではない。ただ、彼らは、はしゃぎすぎでいた。生き生きとしすぎでいた。(中略)結局、彼らには、ほどよい揺れ具合だったわけだ。それが悲しかった。<sup>24</sup>

25  
穂高明『青と白と』中央公論新社、2016年2月、書き下ろし

老人たちは「はしゃぎすぎ」ており「生き生きしすぎでおり」、彼らにとっては地震も、それによる原発事故の被害も非日常を演出する「ほどよい」ものでしかなかったことが示される。また穂高明『青と白と』<sup>25</sup>においても、幼い頃に住んでいた地域を襲った津波の映像を見て衝撃を受ける仙台出身の「私」は動揺しながらアルバイト先である三鷹市役所に向かうが、市役所で同様の映像が流れる場面で心無い職員の反応に遭遇する。

26  
同前、20-21頁

「わー、本当にこれ、すごいなあ!」／ひとりの職員が笑顔でそう言った。まるで映画を楽しんでいるかのような表情を見て、思わず私は椅子を畳む手を止めた。笑顔の意味がわからず、一瞬混乱したのだ。／やがて荷物が運び込まれ始めると、他の職員も「何かワクワクしてきた!」と笑った。／「非常時って感じですよー」<sup>26</sup>

27  
同前、21頁

津波被害を受けた地域に住み続ける家族が「生きているのか、それとも死んでしまったのか」「仮に生きていたとしても(中略)今この瞬間にも息絶えようとしているのではないだろうか」と苦しむ「私」は「最悪の事態も覚悟しなければならない」状況にあるが、三鷹市役所の職員は映画を楽しむように津波を眺め「非常時って感じですよー」と笑う。「私」はそれを見て「この人達が笑いながら軽く言う『非常時』は、私の『非常時』とは違う」<sup>27</sup>と感じる。そこでは東京も確かに「非常時」ではあるが、地震や津波の被害を大きく受けた地域が直面する深刻な現実とはかけ離れた現実を生きていることが示されている。確かに東京も地震や放射能汚染被害の「当事者」ではあったが、深刻な被害を受けた地域との被害の程度の差が両者を隔て、震災により同じ被害を被った「当事者」であるという意識が醸成される余地はない。

28  
初出は奥泉光「東京自叙伝」『すばる』2012年12月-2013年11月号。引用は奥泉光『東京自叙伝』集英社、2014年5月

ただし当然のことながら今回の震災において東京に責任がないわけではない。そのことを奥泉光『東京自叙伝』<sup>28</sup>は示そうとしている。『東京自叙伝』は、自意識をもつ東京の地霊を語り手に据え、霊を特定の人物に憑依させることで江戸の後期頃から現代に至るまでの東京の歴史を描き、時代の変化と、変わらない日本の問題点を炙り出しているが、東京の地霊であるはずの「私」が、福島第一原発にいた鼠に憑依していた謎を東日本大震災後に振り返る場面では以下のように述べている。

東京に原発が欲しい。これがそもそもの私の願いであった話は先に述べたとおり、東京にはドウモ作れぬとなってやむなく東海村や福島へ持って行った次第で、つまり原発のあるところ東京の出先デアル、くらいに私は感じていたんだろう。実際福島で作られた電気のほとんどは東京が使う。加えて原発立地の自治体には多額のカネが東京から投下されるのであるから、ある意味、東京が町村をまるごと買い取ったようなものだ。東京の出先ないし飛び地と見做してあながち誤りとは申せません。<sup>29</sup>

29

同前、388-389頁

東海村や福島の原発で作られる電気のほとんどは東京が使い、カネも東京から投下されるため、原発が立地された土地は、東京がまるごと買い取ったようなものと述べられる。福島原発を東京が買い取ったとしかいえない現実を可視化することは、原発事故の責任が東京にもあることを明示するものといえるだろう。

30

北野道夫「関東平野」『文学界』9月号、2012年、162頁

しかし原発事故後の東京の責任を問う小説ばかりではなく、それどころか深刻な被害を受けた地域を、既存のジェンダー差別の構図を用い「汚染」された場所として、都市から切り離し表象するものも一方では存在する。北野道夫の「関東平野」は汚染された土地と女性を緊密に結びつけて語り、「汚染された」田舎という劣位に置かれた場所を、既存のジェンダー差別の構図を用いて表象している。

31

東日本大震災との関係で差別のコードがみられる例としてはほかにも吉村蔓啓『ボラード病』（文藝春秋、2014年6月）があり、そこに女性と病んだ身体が結び付けられていることや女性が性的に有標化される差別のコードが用いられていることは内藤千珠子『愛国的無関心』（新曜社、2015年10月、31-34頁）によって指摘されている。また坂東眞砂子『眠る魚』（集英社、2014年5月）でも汚染された場所が女性ジェンダー化して表象されており、そこでは家が人を育み、人の選っていく場所であることから家の子宮になぞらえて語り、その家が土地もろとも選れない場所として指定されたことから「その子宮は汚染され」（150頁）たと語られ、これまで病んだ身体として本質化されてきた女性身体の様子が無批判に使用されている。

Iが、妊娠したかも知れない自分の腹から、汚染されたこの関東平野から、逃れられないのに対して、私は適当に記憶を改ざんして、責任の外に出てゆく。<sup>30</sup>

「妊娠したかも知れない自分の腹」から逃れられないのと同様に「汚染された関東平野」から逃れられないとする表象は、女性と汚染された土地を緊密に結びつけ、「私」がそこから出て行った後には孤立させられることを印象づける。「関東平野」は都市との関係で劣位に置かれ「汚染された」土地を女性ジェンダー化して語り、既存の差別構図を温存し<sup>31</sup>、「汚染された」土地を都市から切り離し孤立させる。それは都市が原発事故後の責任の外へと出て行き、孤立した土地が孤独に問題を抱え込んでいることを意味するだろう。

### 3. 作り出される「敵」と、強固になる境界線

原発事故により「汚染された」土地が都市と切り離されて表象されることは、原発事故後の問題を都市とは関係のない「汚染された」土地の問題としてみなしうる点で問題である。その点で田口ランディ「リクと白の王国」<sup>32</sup>は福島で生きていくことを肯定する小説ではあるが、問題がないとはいえない。父の仕事の都合で宇都宮から福島へと転校することになった小学5年生のリクは、横浜に住むみどり叔母さんに被曝を過剰に心配され、リク自身も福島内に充満する閉塞感に嫌気も感じるが、福島に住む子どもたちを対象とした自然体験ツアーで北海道を訪れてからリク自身に変化が起り、みどり叔母さんに以下のように言い返すことができるようになる。

32

初出は田口ランディ「リクと白の王国」キノックスWEBマガジン「キノノキ」、<http://kinonoki.com/>、2015年1月-7月。引用は田口ランディ『リクと白の王国』キノックス、2015年10月

33  
同前、233頁

みどり叔母さんだっていつか死ぬんだよ。どうしていつもぼくらを脅かすようなことばかり言うの？ぼくらはここで生きているんだよ。北海道では、みんなが優しくかった。だからぼくはすごく元気になった。ぼくは、人を勇気づける人になりたい。みんなが明るく元気になるような仕事をしたいんだ。そっちに行ったら、ぼくは別の人間になってしまいそうでいやだ。ぼくは、ここにいる。ぼくは、ここに越して来てよかったと思う。／「もう！勝手にしなさい」／がちゃん、と電話を切られてしまった。<sup>33</sup>

「ここ」で生きることを前向きに肯定する場面ではあるが、「ここ」で生きる人を「ぼくら」と呼び、みどり叔母さんが住む横浜を「そっち」という言葉で示すことは、福島にいる自分たちと横浜にいる叔母さんとを明確に分けるものとなり、原発事故により抱え込まなければならない問題が「そっち」にはないかのように印象づける。一見「がちゃん、と電話を切られ」るように、「ここ」で生きる人に理解を示さない関東と縁が切れることには問題がないようにも思われるが、「ここ」と「そっち」の間に境界線を引くことは「ここ」を汚染された場所として有標化することになり、「そっち」の人たちの「ここ」に対する差別意識や偏見をより助長させ、原発事故の問題を福島だけが抱え込むことにつながりかねない。さらにリクに「ここ」で生きる決意をもたらしたのが北海道という「ここ」ではない場所であったことを踏まえれば、福島だけで問題を解決することの難しさも読み取られる。原発事故は福島のみで解決を図ることができる問題ではない。だからこそ福島を孤立させるべきではない。加えて境界線を引き、内と外を分けることは責任を外へ転嫁することで満足し、問題の所在を見失わせ、問題の解決を遠のかせることにもつながる。

34  
初出は柳広司「卒塔婆小町」『オール讀物』10月号、2015年。引用は柳広司「卒塔婆小町」『象は忘れない』文藝春秋、2016年2月

柳広司「卒塔婆小町」<sup>34</sup>は原発事故後の福島の問題と現代日本が抱える問題とを接続する。漁に出られなくなった夫から家庭内暴力を受けるようになった靖子は3歳になる美海とともに東京へと避難し、東京で靖子は原発についての勉強会に参加するようになるが、その勉強会では「福島から出てきた人間」であるという理由から「こんなことになったのは、あんたたちのせいよ」とでもいっているような目でたびたび眺められる。苦しめられた靖子は公園で出会った見知らぬ中年女性に優しく声をかけられたことをきっかけに「福島原発は東京に電力を送っていた。福島の電気を使っていたのは東京の人たちだ。こんなことになったのは、あなたたちのせいじゃないのか？」<sup>35</sup>という思いがこみ上げ、とり憑かれたようにしゃべり続ける。その後、中年女性は「あなたは悪くない」としたうえで、以下のように語ったとされる。

35  
同前、131頁

彼らの嘘にだまされてはいけない、あなたは何も悪くないのだから。／着物姿の中年女性は、目の前の靖子にあくまで優しくかった。励ましてくれた。その一方で、マスコミや一部の文化人と呼ばれる人たちに容赦のない批判を浴びせかけた。／悪いのは彼らだ。彼らが悪いから、こんなことになった。あなたは悪くない。悪いのは他の人たち。こんなことになったのは、みんな彼らのせいだ。<sup>36</sup>

36  
同前、133頁



そして悪いのは「彼ら」であり「他の人たち」だとする中年女性は、自らが参加する「桜なでしこの会」の活動を紹介し、その会は「日本に寄生し、不当な利益を貪っている不定外国人を断固排除すべく活動を行っている」ものだと言い、靖子を勧誘する。女性は以下のように付け加える。

わたしたちの国は何も悪くない。日本は悪くない。だから、もちろんあなたも悪くない。悪いのは他の人たち。日本が今こんなふうになってしまったのは、日本に悪い人たちが住んでいるから。日本に住んで、不当な利益を貪りながら、まるで日本が世界一悪い国であるかのように触れ回っている奴らがいる。それが、在日チョーセンジンなの<sup>37</sup>

37  
同前、137頁

孤立していた靖子は、「悪い人たち」には容赦のない批判を浴びせるものの自分には優しくしてくれる女性に誘われて「チョーセンジンはミナゴロシダー！」と叫ぶパレードの列に加わってしまう。福島に住んでいた際には、原発事故後に変容した夫の家庭内暴力に苦しめられ、そこから逃げるように東京に来た際にも「汚いもの」を見るように扱われ、孤立し、安心できる場所をもたなかった靖子は「あなたは何も悪くない」「悪いのはチョーセンジン」と言われることで、夫が壊れてしまったことや福島の食材が「汚染されている」という話を聞くたびに責められているように感じていた思いから解放される。「悪いのはチョーセンジン」であるはずがなく、靖子も最初は「桜なでしこの会」の活動に「誘われてきたものの、やっぱりどこかおかしい気がした。この国からチョーセンジンを追い出せば美しい日本を取り戻すことができるだなんて、どう考えても馬鹿げている」<sup>38</sup>と感じていた。しかし娘の美海の上機嫌で安心した表情をみて「このパレードの内側にいるかぎり、自分は守られている。ここにいる人たちは、みんなわたしの仲間だ。敵は外にいる。敵は自分ではなく外の人たちだ。悪いのは奴らだ」<sup>39</sup>と思うようになってしまう。「悪いのはチョーセンジン」という主張に同意さえすれば、自らの責任は全て作りだされた「敵」に「仲間」が押しつけてくれ、自らは孤立から回復する。「卒塔婆小町」が示したのは孤立し、疲弊した人間は自分を「仲間」とみなし守ってくれる集団があれば、その集団がいかにおかしい理屈で「敵」を作りだしていたとしてもその理屈に同意し、集団の外に責任を転嫁してしまうという恐ろしさである。

38  
同前、141-142頁

39  
同前、144頁

『リクと白の王国』もリクが「ここ」で住み続けることを肯定しているが、放射能汚染の問題については解決を見ておらず、放射能汚染についての話題は「ここ」で生きている「ぼくら」を脅かす発言として封じ込められてしまっている。「ここ」で生きることを困難の多いものにしてしているのは、確かにみどり叔母さんの知識に基づかない感情的で過剰な福島への偏見であるが、根本的には原発事故以後収束していない放射能汚染の問題である。偏見をもつ人間を「ここ」の人間でないからと遠ざけ、「そっち」の人間を敵視することは根本にある問題から眼を背け、偏見を解消する契機も失うこととなる。福島のみで解決できない原発事故という問題に直面する現在、なおさら福島と他の地域との間に境界線を引くような表現を行うべきではない。

#### 4. 多様性を圧殺する「ひとつ」の言葉と、書くことの「暴力」性

しかし福島と他地域を切り離してしまうことに問題はありながらも『リクと白の王国』は福島に住むことを気遣うふりをした、実際には住む人を傷つけるものでしかない言葉に苦しみ、その苦しみが他地域に住む人々への怒りへと変わり、関東との関係を絶ちたいと思うまでになる現実を描いている。それもまた福島が抱える思いであるということは可能であろう。例えば「卒塔婆小町」にも「誰もわたしたちを本気で助けてくれない。みんな同情したふりをしているだけだ。“頑張れ、日本、頑張ろう東北”“ニッポンには夢が必要だ”、そんな言葉は聞きたくもない。“絆”なんて意味がわからない」<sup>40</sup>という言葉がみられ、関東が発信するひとつになろうと呼びかける言葉の欺瞞が指摘される。無責任な立場から「当事者」の心情を省みず発せられる言葉に傷ついている人々がいることは事実である。そのような言葉の欺瞞と暴力を垣谷美雨『避難所』<sup>41</sup>もまた描いている。津波で自宅が流された人々の避難所での生活を描く『避難所』には田舎に残る家父長的な価値観に苦しめられる女性たちが登場する。女性たちが苦しめられる一例として、避難所のリーダーを買って出た秀島という男が女性たちの要望を顧慮せず、避難している人同士の間を仕切るダンボールは不要だと述べる場面が挙げられる。

あのね皆さん、よく聞いてくださいね。私だづは家族同然なんです。これがらも協力して生活していかなければなりません。つまり、ひとつにならなければなんねってごです。だから互いに絆と親睦を深めましょう。連帯感を強めで乗りきっていきましょうよ(中略)だからね、我々に仕切りなんでもものは要らねえです<sup>42</sup>

秀島はこれからも協力し連帯感を強めるために、仕切りは不要であるとするが、その理屈は実際には男が女性の一挙手一投足を見ることを可能にする男にとって喜ばしいものでしかない。それは避妊薬が県より支給されたことを告げる秀島が「男だづも苛々してっがらね。そういうごどがあっても仕方ねえだろうね。だから女性のみなさんも勘弁すてやってね」と述べるところからも男の都合が良いように「ひとつ」にしようとする意図が垣間見える。秀島の発言を聞いた山野渚は以下のように思う。

「家族同然」「ひとつになろう」とお題目を唱えながら、レイプを黙認しようとしている。それにその根拠なき脅しはなんなのだ。「和を乱す」のひとつことで人々はいつもしんとなる。そしてじわじわと個人の権利感覚を奪っていく。<sup>43</sup>

「ひとつになろう」とするお題目は男たちが自分たちの都合の良いように避難所を運営するために用いられ、「和を乱す」と捉えられる行為も男たちの意図にそぐわない行為を封じ込める言葉として機能している。土地に根強く残る封建的な家父長制度は男たちに強権を与え、男たちの都合を正当化し、そこに口を挟もうものなら白眼視されるため女性たちは権利を剥奪され、言葉を奪われていく。題目として主張される「ひとつになる」ことは一見美しくも響くが、その場を支配する言葉以外の言葉を抑圧し、黙殺することで成立する「ひとつ」は場を支配するものたちにとって

40  
同前、131頁

41  
垣谷美雨『避難所』新潮社、2014年12月、書き下ろし

42  
同前、103頁

43  
同前、142頁

都合が良いものでしかない。発せられる言葉が誰のためになっているのかを常に考えなければ、大多数の人間にとってのみ美しく、都合が良い言葉になる恐れがある。『想像ラジオ』を記したいというせいは星野智幸との対談において「小説自体に対して当事者のことを考えて書けよと言われたら僕はもう何も言えないんです。だから一語一語、これが人を傷つけてしまうのではないかって、ずっと心拍数が上がったまま今も直している」<sup>44</sup>と述べているが、ひとつの言葉が他の言葉を圧殺し、誰かを傷つける「暴力」となりうる以上、いとうの憂慮と逡巡は的外れなものではない。

44

いとうせいこう、星野智幸対談「想像すれば絶対に聴こえる」『文藝』春号、2013年、122-123頁

## 5. 「当事者」でない文学にできること―福島を突きつける

しかし求められているものは沈黙ではないだろう。『避難所』には封建的な雰囲気や避難所を支配し生活しづらいことを、避難所を管理するNPOに相談した際に「『当事者の自治を尊重しているから介入はできない』と突っぱねられ」<sup>45</sup>の場面が描かれる。また遺族に支払われる見舞金が世帯主に一括して支払われるため自らの手元に現金が届かないことを市の職員に相談した際にも、「それぞれの家の事情には口を挟めないが」<sup>46</sup>と突っぱねられている。「当事者」の自治や意思や事情を尊重するあまりに沈黙してしまえば、「当事者」の間だけでは解決できない問題を見殺しにすることになりうる。特に原発事故は福島に住む「当事者」だけで解決可能な問題ではなく、少なくとも日本の問題として向き合うことを必要とする問題である。福島以外の他地域を動員し、現実の忘却に歯止めをかけることは急務である。柳広司と木村友祐の作品を基に、文学が人々の関心の喪失と忘却に対して果たしうる可能性を提示したい。

45

注40に同じ、133頁

46

同前、193頁

柳広司「俊寛」<sup>47</sup>は原発事故により故郷を追われた俊寛が、避難先で人が生きていくためには「自分が何者なのか確認するための鏡が必要」であるという思いに至り、俊寛の地元地区の人々にとっては「毎年春と秋に行われる祭りがその場」<sup>48</sup>であったことに気がつく。そこで俊寛はせめて地元の獅子舞だけでも避難先で復活させられないかと奮闘する。俊寛は獅子舞の稽古を眺めながら以下のように思う。

47

初出は柳広司「俊寛」『オール讀物』1月号、2016年。引用は柳広司「俊寛」『象は忘れない』文藝春秋、2016年2月

48

同前、200-201頁

地元地区の人々の様々な思いを受け止めて、何百年も前から獅子は舞い続けてきた。これからも何百年経った後も舞い続けているはずだった、原発事故でふるさとを追われることさえなければ。／絶やしてはならない。／俊寛は改めてそう思った。／この獅子舞は、ご先祖様たちが生きてきた証しなのだ。同時に、自分たちがいまを生きている証しでもある。<sup>49</sup>

49

同前、206頁

次の世代へと舞手を交代しながら地元地区の人々の思いを受け止め、何百年も前から舞い続けられてきたことにより獅子舞は、先祖や自分たちが生きている「証し」であると俊寛に捉えられ、絶やしてはならないとされる。それを避難先で復活させることは、帰宅困難になった福島を避難先に持ち込むことであり、獅子舞が舞う場と時間を福島のものとするものである。獅子舞が舞う瞬間には福島が迎って

きた時間をその場に読み込むことが可能となり、獅子舞が福島ではない避難先で舞っていることは福島で舞うことができなくなった東日本大震災以後の現実を端的に指し示す。結局その試みが実を結ぶことはなかったが、獅子舞を避難先に持ち込もうと試みたことは、避難先に溶け込んでいくのではなく福島を忘れずに生活することを意味し、福島で獅子舞を舞うことができなくなった東日本大震災以後の大きな日常の変化を突きつけるものとなりえた。

50

初出は木村友祐「聖地 Cs」『新潮』5月号、2014年。引用は木村友祐『聖地 Cs』新潮社、2014年8月

木村友祐「聖地 Cs」<sup>50</sup>もまた福島の実実を読者に突きつける。警戒区域内に取り残された牛たちを生かそうとする「希望の砦」の取り組みをドキュメンタリー映画で知った「わたし」は「希望の砦」でのボランティアに参加する。ある時「わたし」は泥の下に隠れていた深い穴に足を取られ、放射性物質に汚染されている牛の糞泥まみれになり、そのまま向こうから歩いてくる自分のイメージに利用するために「希望の砦」を訪れた政治家「ミクマリ」に近づく。

51

同前、83頁

「見てください。よく、見てください。これは、いのちの証しです。いのちの証しです……」そう口走りながら、糞泥を、糞泥 Cs を、切り捨てられた牛たちが生きた満々たる証しを、彼女の眼前に突きつけていたのです。<sup>51</sup>

52

同前、91頁

警戒区域内まで足を運ぶものの自分のイメージのために「希望の砦」を利用したいミクマリは自分が見たいものだけを見ればよく、「わたし」が後に「ミクマリ本人は、顔を覆って金切り声を上げるばかりで、わたしが差し出したものを見ようとしませんでした」<sup>52</sup>と回想するように「見てください。よく、見てください」と突きつけられなければ、糞泥などは見ようと思わぬものだったのであり、突きつけられても見ることを拒むものであった。福島が置かれた厳しい現実を見ることを拒む人間の増加は、福島の置かれた現状を過小評価し、福島の現実を見えないものとするにもつながる。さらに放射能汚染は目に見えるものではなく、「わたし」にも「希望の砦」は「のどかそのものでした」と感じられるものであり「ただ手に持った測定器だけが、この地はふつうとはちがうのだということを感じし、休みなくわたしに伝えてきます。測定器を信じるとすれば、今、あらゆるものに『見えないもの』が付着しています」<sup>53</sup>と語られるものである。ただでさえ福島の実実は測定器がなければ「見えないもの」である。福島が見えなくなっていくなかで、文学が福島の現実を突きつけることは「見えないもの」を見えるようにする「測定器」の役割を果たすものとなるだろう。

53

同前、70-71頁

## おわりに

文学が見えないものを可視化する役割を果たしうるといっても、それで書くことによる暴力性が消えるわけではない。福島で取材を行い、ほとんどの会話を録音から起こしたそのままで構成した岡映里『境界の町で』には「福島を、福島の人たちを、どれだけ深く知っても、所詮『よそのもの』でしかない私の言葉は『福島を消費』し、『福島を踏み荒らす』ことになるのだろうか」<sup>54</sup>という一文がみられ、「聖地 Cs」

54

岡映里『境界の町で』リトルモア、2014年4月、223頁

にも、仙道さんが、牛を生かし国や発電所の「喉元に刺さったトゲ」となることで、震災をなかったことにしようとする動きに抵抗すると述べた後に「牛を殺すのもひとの勝手だとすれば、こんなに高い放射線に汚染されたところで生かすのも、こっちの勝手ですね。これって、牛にとって幸せなことなんですかね」<sup>55</sup>と議論が行われており、牛を自分たちの主張や都合のために「勝手に」生かしているのではないかという疑念が書き込まれている。「よその」である「非当事者」が東日本大震災について書くことの正否も、福島の実状を利用しているのではないかという逡巡も安易に答えが出せる問題ではない。しかし「聖地Cs」で「希望の砦」に集まるひとたちは「東北人以外が多いということ」、「現在も東北で暮らしてるひとは、岩手県出身で今は宮城県在住の安田さんだけ」<sup>56</sup>とされていることを踏まえるならば、『避難所』に描かれるように被災し毎日を生きることのできる「当事者」には手を回すことができない作業があるとはいえるだろう。「聖地Cs」におけるそれは牛を生かすことによって、福島の実状を可視化し、震災や原発事故をなかったことにしようとする人間たちに抵抗することであった。忘れ去ろうとする人間に対する抵抗は確かに福島を利用し行われるものかもしれないが、「当事者」を傷つけることを恐れて沈黙しているだけでは、忘却は間違いなく進んでしまう。

本稿では東日本大震災直後から現在に至るまでの小説を分析の対象とした。すでに述べたように震災直後は関東圏に住む作家であっても自らを震災の「当事者」と位置づけ小説を書くことが可能であった。高橋源一郎は東日本大震災後に、9.11を受けて執筆され未完に終わっていた「メイキングオブ同時多発エロ」を書き直し『恋する原発』を発表しているが、高橋は「メイキングオブ同時多発エロ」を書ききることができなかったのは9.11を「結局、最後まで自分の問題だと思えなかった」からで『恋する原発』が書けたのは「3・11が起きて、これは『自分』の問題だよねと思えたとき、自由に書けるなと感じることができた」からだとして述べている<sup>57</sup>。東日本大震災から月日が経過した現在、小説家が震災を「自分の問題」として捉えることが可能であったとしても、それを「自由に」書くことはきわめて難しくなっているといわざるをえない。そのような状況になったことは被災地と他地域を分断する表象や、深い洞察に基づかず発せられた「当事者」を傷つける言葉が横行した結果でもあり、東日本大震災に関して発言を行おうとするものが今後担わなければならない責任として自覚する必要があるだろう。そして今後東日本大震災を「利用」するのではなく、「自分の問題」として震災と現実を捉え、書くためには、放射性物質の問題からは目を背けてはならない。そのことを村雲司『阿武隈共和国独立宣言』<sup>58</sup>は物語っているように思われる。『阿武隈共和国独立宣言』は福島原発事故の被災地となってしまうひとつの村が、日本に見捨てられようとしている現実を世界に向けて発信するため、日本からの独立を宣言する小説である。以下に独立という提案を行うに至った背景を阿武隈村の村長であった長老が説明している場面を引用する。

この無慈悲な提案がなされる背景にあるのは、初期の段階に除染土ばかりか、放射性物質に汚染された可能性のある瓦礫の受け入れにも躊躇し続けた、他

55

注41に同じ、53頁

56

同前、48頁

57

高橋源一郎、聞き手、佐々木敦『『恋する原発』処女作への回帰と小説家の本能』『群像』1月号、2012年

58

村雲司『阿武隈共和国独立宣言』現代書館、2012年8月



地域のみなさんの態度です。(中略)放射性物質を全国に分散する危険も十分に承知しているつもりです。しかし、危険だからと言って、被爆地に住む者たちの苦哀を一顧だにせず、口を揃えて『受け入れ拒否』と叫ぶ姿に、私たちはあっけにとられました。被爆地と他地域を分断しようとする政府の作戦に乗ってはなりません。膨大な量の放射性物質をどうするかを、わがこととして一緒に考えて下さるよう訴えます。<sup>59</sup>

ここにおいて「わがこと」として震災を考えるのであれば、放射性物質をどうするかを考えなければならないということが示される。また同時に全国に放射性物質を分散させる危険性も書き込まれており、汚染された可能性のある瓦礫の受け入れを求めるものではないことも示される。求められているのは、瓦礫を受け入れ一緒に被爆の危険性に身をさらすことではなく「被爆地に住む者たちの苦哀」を思い「一緒に考え」ることである。そしてここからは放射性物質の問題に関して危険だからと一顧だにせず思考を放棄することは結局、被災地に汚染された物質の処理を押しつけることになり、被災地と他地域を分断する者たちに手を貸しているに等しいということを読み取ることもできる。本稿では柳広司「俊寛」と木村友祐「聖地Cs」を震災の問題を忘却しようとする人々に対する抵抗の可能性を示すものとして取り上げたが、両作品とも放射性物質による汚染の可能性により住むことが困難なものとなっている福島の実態に触れていることにも注意しなければならない。放射能汚染の問題は川上弘美「神様 2011」より考察の俎上に乗せられ続けているが、今後の課題のひとつは放射性物質と、それによって汚染された物質の処理の問題を考えることにあるだろう。東日本大震災以後を生きる「わたしたち」には、震災の忘却の問題とともに汚染された物質の処理について思考することが求められている。

今後とも東日本大震災については書かれ続けるであろうし、被災地の問題として震災の問題を片付け、忘却させないためにも様々な角度から書かれ続けなければならないだろう。本稿を端緒に東日本大震災に関する考察を深めていきたいと考えるが、放射性物質がもたらす被災地と他地域、および被災地内での分断に関するさらなる分析や汚染の危険に身をさらしながら生きている人々に対する考察は稿を改め行う必要があり、東北在住あるいは出身の作家や震災に遭遇した作家の記した言葉についても、商業作家、同人作家を問わず考えていく必要がある。自費出版にて自らの言葉を届けようとした例も多くあり、その言葉は受け止められ、考えられなければならない。課題は山積しているが、今後とも考えていきたい。

#### 附記

本稿は名古屋大学付属「アジアの中の日本文化研究センター」主催の国際シンポジウム「文化に媒介された環境問題—東アジア関係学のエコロジー的探究」中の新世代パネル「共生と軋轢」(2016年7月30日)にて発表した内容を大幅に見直したものである。パネルにてディスカッションをご担当いただいた金井景子先生、会場よりご質問いただいた結城正美先生に、末尾ながらこの場を借りて厚くお礼申し上げます。